
柊と独身男

小豆色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

柊と独身男

【Nコード】

N6387Z

【作者名】

小豆色

【あらすじ】

喋る柊と、独身男が織りなす不思議なストーリーをお楽しみください

柊が恋する独身男

春、夏、秋、冬。

日本が誇る、美しい四季。

古き時代から親しまれ、愛され続けている四季。

しかし、今の日本人…いや、現代人は
四季を楽しむ気持ちが欠けているのではないだろうか？

かくいう私、牧野息吹もその一人なのだろう。

目の前には、「冬」の名を冠する柊の木が立っている。
その堂々とした、私を通さぬと言わんばかりに
覆い被さろうとする出で立ちは庄巻の一言につきる。
しかし、それ以上の感情は浮かばない。

趣がどうか、風情がどうか、私には分からない。
人の言う、感情もつすい方だ。そんな私に分かる訳がない。

しかし…。そんな私でもだ。
私でも、今日の柊が落ち着いた、和やかな雰囲気である事が感じ
られた。

なにか、いつもとは違うのではないか…。

そんな考えが頭をよぎる。普段なら笑い飛ばすような話だ。しかし今は、今だけは信じたくなった。

それほどに、今日のこの柊からはいつもと違う「何か」を感じ取っていた。

何故だろうか。こんな事は初めてだった。

知り合いの会社に入社してから早15年。

念願の研究職に就く事ができた。

初めは、研究していられるだけで幸せだった。

夢中で研究を続けていた。仕事仲間とも仲良くなっていた。そして、いつからか研究主任を任せられていた。

楽しかった。後悔もなかった。なかったはずだった。でも、この木の前にいると、不安になる。

研究職に配属になった時に貰ったお祝い品の中にこの柎の苗があった。

正直最初は気が進まなかったが、育てる事にした。あつという間に、ぐんぐんと成長し立派な木になっていた。その堂々とした姿に励まされた事はたくさんあった。

でも、この木の前に立つと、いつも不安になるのだ。

果たして、自分は正しかったのだろうか？

それとも、仕事よりも結婚を重視すべきだったのだろうか、と…

この柎は、猛烈に家族というモノを恋しくさせた。

知り合いが少ない訳でない。女友達がいらない訳でもない。

むしろ、多い方だろう。これ以上は私自身も望まない。

浅くても深い付き合いがしたいと思っているからだ。

…しかし、そうではないのだ。友と家族は別物だ。

それこそ、月とスッポンよりも。

私の親は私に興味が無かった。ずっとほったらかしだった。でも、特に不満はなかった。親への憎しみも、愛しさもなかった。あるのは好奇心と研究欲。ひたすら大学を目指しバイトをしてい

た。

そして、高校卒業後は家をでて一人で暮らし始めた。
それから一度も会う事が無かった。

昨年、母がガンで倒れた。既に末期で、入院から一週間ほどで亡くなった。

そして、追いかけるように父が自殺をした。

それを聞いても特に何も感じなかった。

むしろ、葬式代と時間を取られる事に腹が立っただけくらいだ。

それでも、そんな家族でも。友とは違うのだ。
別格、とでも言うのだろうか。

そうやって、柄にも無い事を考えていた時だった。

「どうかしたんですか？」

りん…と、まるで鈴のように澄んだ声が聞こえた。
私は驚いた。ここは、私の庭。私が育てた、柊の前。
誰かがいる訳が無い。この辺りは田畑しかない。
それに、私はこの鈴のような声を聞いた事が無い。

ハッとして柊を見た。確かに、この方向から声が聞こえた。
でも、いくら柊が大きいとはいえ、人が隠れるほどの幅は無い。

では、誰なのか。それは…。
ふっと、ばからしい考えが浮かんだ。
まさかとは思ったが、確かめずにはいらなかった。

「柊の木…お前が喋ったのか？」

「ええ、そうですよ」

さわ…

まるで頷くかのように木の葉が揺れる。

雪が積もった田畑を背景に、白い花が開いた柊が揺れる様は幻想的だった。

しかし、木が喋る様はあまりに変だった。

「そうか…。お前、喋れたんだな…」

木が喋る。普通な驚くべき所なんだろう。
でも、私は驚かなかった。

そんな感情よりも、嬉しさ…なのだろうか？
愛しさとも言うべき感情が強かった。

「ええ。あなたと話す事ができて嬉しいです。
いつもお水や手入れ、ありがとうございます」

柊…声からして女性なのだろうか。彼女が話すことに木が揺れる。

まるで、人のように…

「そうか、それはよかった」

「はい。ところで、一つお話があるんですが…
ちよっと、戯言に付き合ってくださいませんか？」

まるで家族と会話しているようだった。

もちろん、私の親のような、偽りの家族ではない。

心から守りたいと思う、愛したいと思う、本当の家族と。

ただの柵の木。もうそんな風には思えなかった。

彼女はすでに、私の家族だった。

「いいぞ、私でよければいくらでも付き合おう」

「ふふ…。ありがとうございます」

嬉しそうに彼女は笑った。おもわず私も笑顔になる。

こんな気持ちは初めてだ。楽しい、というのをひしひしと感じる。

「じゃあ、一つ提案です。」

息吹さん、養子を育ててみたらいかがですか？」

それは…。

まるで、さっきの思いを聞いていたかのような提案だった。

しかし、満更でもない気分だった。後押ししてくれている気分で
さえあった。

そんな質問をする柊に、そしてそんな気持ちになっている自分に驚いた。

「…なんで、そう思った？」

動揺が声に出ている。おかしい、普段なら適当に受け流すのに。でも、そんな事よりも彼女の理由が聞きたかった。

彼女はそんな私に、まるで諭すように、優しく語りかけた。

「息吹さんが私の前に立つと、何故か寂しそうでした。まるで迷っているかの様でもありました。」

私も、そんな息吹さんを見て寂しくなりました」

彼女の声が少し細くなる。

声に合わせて柊の葉が、落ち込むかのようにすこししなる。そして、その声もだんだんと泣きそうな声になっていく。

「なんで息吹さんは寂しそうなんだろう？」

私にできる事は無いんだろうか？

しばらく、自問自答する日々が続きました」

「どうやら、私は知らぬ間に心配をかけていたようだ。申し訳なさと情けなさが胸を締め付ける。」

「そんなある日、この家の前をある家族が通ったんです。とても楽しそうでした。そして、ようやく気がつきました。ああ、息吹さんは家族が恋しかったんだ…」と」

「ああ…すべてお見通しってわけか…」

「家族が恋しい。ついさっきようやく気付いた事だ。単純にお見通しなだけでない。私自身すら気付かなかった事に気付いていたのだ。」

「改めてかなわないなあと感じる。私よりも、よっぽど人間らしかった。」

「そのあと、どうすればいいのか再び悩みました。でも、不思議と結婚という選択肢は浮かびませんでした。だから、養子を貰えばいいのではと思いついたんです」

「…なんで、結婚が選択肢から外れたんだ？一番妥当な線ではあるんだが…」

私の質問に、彼女は苦笑いのような声をしながら、ちよっぴり恥ずかしそうに答える。

「…嫌だったんです。大好きな息吹さんが他の人に取られるだなんて」

「それは…」

そこまで私は好かれていたらしい。
でも、とても嬉しい。心が満たされていくのが分かった。

「ま、まあ。それは置いておいて。どうですか？養子を貰うのは」

さすがに恥ずかしかったらしく、あわてて話題を切り替えた。
しかし、先ほどの話を聞いた私にとって、その質問は不要だった。

「君との子供、ということだろう？もちろんいいよ」

「わ、わたしのことも…！」

赤面したようにほのかに花が赤くなり、ぶんぶんと枝をふる彼女。
その様子が面白くて笑みが止まらない。

「じゃあ、早速貰うでしょう」

「あ、私女の子がいいです！」

「そうだなあ。私もそう思う。名前はどうする？」

「そうですね…。りつか…、うん、六花なんてどうですか？」

雪の結晶の俗称である六花。牧野六花か…。

「いいね。じゃあ、牧野六花で」

「ふふっ、楽しいです」

本当に。彼女と話していると笑みが止まらない。

「じゃ、そういう団体に話をしてくる」

「そういつて、一旦離れようとした。
しかし、彼女の様子がおかしかった。

「っ…！うつ、うつうつうつ」

「ど、どうした！？」

彼女は急にうめき声を漏らした。声はとても苦しそうだった。
何をそんなに急ぐのか、矢継ぎ早に私に語りかける。

「い、息吹さん、私はもう話せなくなります。それからは、ただの
柵の木に戻ってしまいます。

ですから…！、あ、あうつつ、うつ…。ど、どうか聞いてください」

「な、なんだ？」

何が起こっているのか分からない。これから何が起こるのかも分からない。

分かるのは、愛しい家族が消える事。ただそれだけだった。

「どうか、幸せになってください…。つく…た、ただ、私の事、忘れないでくださいね。

そんなんだったら、泣いちゃいますからね」

必死で声を出す彼女の声を聞くと苦しかった。涙が出そうだった。

「私、応援してますから…。ひ、必死に応援しますから！
いつか、再び喋れるまではお別れです。さ、さようならあ！」

泣き声でそう伝えると、彼女はもう喋れなくなった。

しばらく呆然としていたが、やがて決心し、立ち上がった。

養子を貰うために。

彼女のための肥料を買うために。

私はこの日決心した。

絶対に、木が喋れるようになる器械を作ってやる。

そう心に誓い、歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6387z/>

柊と独身男

2011年12月21日18時51分発行